

秋田県立大学「人類の持続可能な発展に資する科学技術」
「苗」研究のエントリーシート

研究テーマ	犯罪に遭いやすい高齢者の認知バイアスの研究		
研究代表者	渡部 諭	役職	教授
フリガナ	ワタナベ サトシ	学位	教育学修士
学科等	総合科学教育研究センター	Eメール	watanabe314@akita-pu.ac.jp
主な共同研究者(学内)			
主な共同研究者(学外)	澁谷泰秀（青森大学社会学部）		
研究の内容			
<p>本研究の目的は、近年の高齢者の犯罪被害件数の増加に対して、認知心理学からのアプローチを提案するものである。特に、高齢者認知研究において明らかにされた高齢者の認知バイアスからの研究と提言をめざす。</p> <p>健常高齢者の認知機能に関する近年の研究成果は目覚しく、若年者と異なる高齢者の認知機能について多くのことが明らかになってきた。認知心理学では、人間が推論や意思決定を行なう際にその個人に特有のヒューリスティクスを用いると仮定するのが一般的である。ヒューリスティクスとは、個人に特有の物事の処理の仕方の中で、その個人の考え方のクセやコツのことである。そして、このヒューリスティクスが若年者と高齢者とは異なることを見出したのがわれわれの一連の研究である（「本研究に関連する主な研究実績」をご参照下さい）。具体的には、意思決定におけるフレーミング効果において、高齢者は若年者とは異なるヒューリスティクスを用いることを明らかにした。すなわち、意思決定を行なう場面・文脈（＝フレーム）を定式化する際に、高齢者は若年者とは異なったフレームを用い、その結果意思決定の結果も異なることを明らかにした。これは、振り込め詐欺の被害者に高齢者が多いことの原因にも関連することであると思われる。</p> <p>高齢者が若年者とは異なったヒューリスティクスを用いるということは、高齢者と若年者の認知機能は量的に違うのではなく、そもそも質的に異なることを意味する。したがって、高齢者の犯罪被害に対して従来とられてきた啓発広報活動のように常識的な知識を高齢者に対して説くことよりは、高齢者認知研究の成果を取り入れた科学的な方法を探究すべき段階に来ているものと思われる。さらに、高齢者の犯罪被害の防止に高齢者心理学研究の専門家を含めたり、高齢者が被害者の半数以上を占める振り込め詐欺の原因分析に、高齢者の認知特性からの分析がなされることも望まれる。</p> <p>このように、高齢者と他の年齢集団との罪種別被害の相違に注目したときに、高齢者はなぜ犯罪被害に遭いやすいのかという問題に対して、高齢者の認知バイアスからの究明とそれに基づく対策の提言が可能になるものと思われる。</p> <p>（平成22年度社会安全研究財団研究費採択課題、平成23年度三井住友海上福祉財団研究助成採択課題、平成23年度学長プロジェクト研究採択課題）</p>			

研究の独自性・アピール点

上で述べた仮説の検証を通して、犯罪被害に陥りやすい高齢者の認知特性が明らかにされる。具体的には、仮説検証のためのモデル作成を通して、高齢者と若年者の比較、犯罪被害性得点が高い高齢者と低い高齢者の比較が行なわれ、犯罪被害性と関連する要因の特定がなされる。

期待される成果・波及効果

高齢者が若年者に比べて犯罪被害に遭いやすいのはなぜなのか、高齢者の中でも犯罪被害に遭いやすい人とそうでない人との違いはどこにあるのか、という問題に対して認知バイアスの方向からの解答が得られるものと期待され、さらに、それに基づく対策の提言を行いたい。

関連する主な業績

Satoshi, W. and Hirohide, S. 2010 Aging and decision making: Differences in susceptibility to the risky-choice framing effect between older and younger adults in Japan. Japanese Psychological Research, 52, 163-174.

渡部・澁谷 2010 意思決定方略における年齢による相違と生活の質(QOL) 日本認知心理学会高齢者心理研究部会第4回研究会、東京都健康長寿医療センター研究所

キーワード

犯罪被害、高齢者、認知バイアス